



## 説教要旨「裏切り者たちの神」

使徒言行録 13章 13～41節

ピシディア州のアンティオキアに着いたパウロとバルナバは、安息日にユダヤ人たちの会堂に入ってその礼拝に出席しました。そこで会堂長たちから「何か会衆のために励ましのお言葉があれば、話してください」と依頼され、これに答える形でパウロが語り始めたのです。

そこでパウロはまず、イスラエルの民の歴史を語り出します。そこではいつも神様がイスラエルの民を支え導いてこられました。そして、イスラエルの民への神様の導きの歴史が、ダビデへの約束を通して、イエス・キリストにおいて成就、実現したというのです。イエス・キリストによる救いの福音は、イスラエルの歴史と切り離すことのできないものであることを伝えています。

旧約聖書に描かれるイスラエルの民の歴史は、決して神に忠実で、信仰に満ちた、清く正しい歩みではありません。そこではこれでもかと言うくらい、神への背反と人間の罪深い姿が、何度も何度も繰り返されていくのです。けれども神は、そのように不忠実なイスラエルを切り捨て見捨てることはなく、何度も何度も救いの手を差し伸べるのです。イスラエルの歴史は、一方では人間の裏切りと罪と背反の歴史であり、他方ではその人間の罪と背反にもかかわらず、人間を見捨てることなく、どこまでも招き続け、憐れみ続け、赦し続けてこられた神の愛の歴史でもあるのです。

わたしたちにしてもそうです。神様をないがしろにして、自分の思いばかりを押し通そうとしてきたのではないのでしょうか。決して自分が神様に救われるに足る人生を送ってきたなどとは言えません。けれども、裏切り続けるわたしたちを、神様が見捨てることは決してないのです。なぜなら、イスラエルの歴史が、そしてイエス・キリストの生涯が、神の限りのない愛を明らかにしているからです。神様は何かをした人だけを愛すると言うような器の小さいお方ではないのです。私が神様を愛したから、神様が私を愛してくれたのではない。まず神様が、このどうしようもない私を愛して下さったのです。

(2022・7・31 説教者：稲垣真実)